

はじめての白川郷、はじめての村研

寺 口 瑞 生

「コートの用意するように」という事務局からの「指示」にいさかの不安を覚えながら、厚手のジャケットを着込み、友人の車に同乗して一路白川郷へ。案の定というべきか、途中から冷たい雨が降り出し、ラジオのニュースによれば雪のため閉鎖された林道もあるとのこと。やがて前方に今まで写真でしか見ることのなかった合掌集落が見え始める。白川郷だ。

私にとって、村研の大会にフルに参加するのは実は始めてのことだ。入会させていただいたのは4年前だが、それ以後は途中から参加したり、貧しい院生で旅費の工面がつかなかったり…。

大会会場は荻町公民館。地元の方々の協力で、大会は予定通りスタートし、まず自由報告が始まった。

清水会員の「住友の資本蓄積構造に果たした土地集積の役割と別子銅山煙害事件」。「土地集積を通じて人・土地・米という三層循環の、地域に密着した独自の資本蓄積構造を創りだし」た住友資本に焦点をあて、「四大銅山」の公害事件の歴史的把握の基軸として考察されたものであった。

武笠会員の「戦後の農村変革と緊急開拓政策—岩手県東磐井郡旧興田村の事例—」。緊急開拓政策は、「戦後農政の形成に先行しつつ、その特色はもともと早く具現化したものであり、「戦後農政の原型が見られる」という観点からの報告であった。

佐渡会員の「年齢階梯型（ひと結合型）村落と家連合型村落」。従来の村落社会は、今日「生活保障機能の弱化などの矛盾や困難に直面」し、今後は「人間を主体とする新しい農村と農業を形成しうるような」「近代的個人」の形成が望まれるとされた。

福与・有田会員の「都市化圧力による土地評価基準の変化」。都市化の進展が農家の土地意識に対しても「生産手段」から「資産」と変化しつつあることを都市化圧力の程度により分析された。

堀川・工藤会員の「要村型有線テレビがコミュニケーション活性化と技術普及に及ぼす効果」。ニュースメディアを地域の活性化にどの程度役立つか、その現状と将来の可能性を展望された。

大森会員の「先進的稻作経営の今日的課題について」。秋田市近郊農家の経営動向とともに、「村離れ」と「町的」信頼関係にもとづく経営を可能にする条件について考察された。

岩本会員の「秋田県大潟村の農業経営と村落」。「日本のモデル農村」を志向していた大潟村の農業経営についての詳細な報告がされ、「経営に成功、むらづくりに失敗」との所感を表明された。

二日目の課題報告は、「農村社会編成の論理と展開—転換期の家と農業経営」の共通課題のもと、三氏（組）が報告された。

徳野会員の「農業危機における農民・農協の新たな対応」。個別農家・團體農場・農協の三つの事例を紹介し、「元気な農業」を「元気に」報告された。

奥山会員の「農村における高齢化の現状と農家高齢者の生活」。

農村社会の現状をマクロな視点から報告された。

村松・青木会員の「有機農業運動の地域的展開」。高畠町有機農業研究会の活動を詳細に報告された。

さて、質・量ともに豊富な報告を二日間で聞かせていただいたが、正直なところ、私には大会期間中にその全てを消化することはできなかつた（締切をだいぶオーバーして原稿を書いている今もそうであるが）。とりわけ、課題報告はそれぞれにボリュームのある、きわめて興味深い問題ばかりであるが、残念ながら共同討議の場では、交通機関の時間の制約もあって、落ち着いた雰囲気での討議ができなかつたことが残念であった。また、大会に先立つ地区研究会での討議、たとえば関西では「家」についての議論がなされたが、その議論とのつながりを見いだすことの難しさも痛感された。

大会運営の難しさ、司会団のご努力には頭が下がるが、まだまだ駆け出しの私には議論の全体像とその先を見通すことができない。自分の不勉強を恥じるとともに、何とか、議論の継続性を保障することはできないものだろうか。たとえば、報告者の方々に、事後のコメントを頂きそれを研究通信に載せるというのはいかがであろう。客観的なまとめであることながら、思いつきり「主観的」なコメントもおもしろいと思うのだが。

最後になりましたが、大会運営にご尽力頂いた柿崎先生、(前)事務局の吉沢先生、そしてなによりも、「どぶろく祭」で忙しい時期に大会開催にご協力頂いた、白川村の方々にお礼申し上げます。